

## Lacan の性別の公式についての若干の考察

小笠原晋也

<http://www.lacantokyo.org>

Lacan は男女の性別を形式的に規定する「性別の公式」を、彼の書 *L'étourdit* と *Séminaire Encore* において提示している。それらは、形式論理学の記号で書かれているが、一見したところ矛盾を含んでおり、それらを通常の論理式と同類のものとするならば、ばかげたものにしか見えないだろう：

男： $(\forall x) \Phi(x) \wedge (\exists x) \neg \Phi(x)$

[すべての  $x$  について命題  $\Phi(x)$  は証明可能である、かつ、命題  $\text{non } \Phi(x)$  :「 $\Phi(x)$  ではない」が証明可能であるような  $x$  が現存する.]

女： $\neg(\exists x) \neg \Phi(x) \wedge \neg(\forall x) \Phi(x)$

[命題  $\text{non } \Phi(x)$  が証明可能であるような  $x$  は現存しない、かつ、命題  $\Phi(x)$  が証明可能であるのはすべての  $x$  についてではない.]

しかし、勿論、Lacan は単にふざけているわけではない。読解を試みてみよう。

素朴な仮定から出発しよう。もしひとつの言語存在 [ *parlêtre* ] — すなわち、言語に住まう人間主体 — が男であるなら、それは、男の本有を定式化した命題  $M(x)$  により規定される男性言語存在の集合に属している：

$$x \in \{ x \mid M(x) \}$$

同様に、もしひとつの言語存在が女であるなら、それは、女の本有を定式化した命題  $F(x)$  により規定される女性言語存在の集合に属している：

$$x \in \{ x \mid F(x) \}$$

はたして、それらふたつの命題  $M(x)$  と  $F(x)$  は如何なる式であり得るのか？そもそも、それらは実際に論理式として書か得るのか否か？

それらの問いに取り組むためには、まず予備的に、言語存在とは何かを思考せねばならない。

『ハイデガーとラカン』(HEIDEGGER AVEC LACAN) において示したように、Lacan の「精神分析家の言説」の構造に基づいて、**存在の真理の現象学的構造**はこう形式化される：

$$\frac{a}{\Phi}$$

この学素 [ mathème ] は、分数のようなものではなく、ひとつの代表ないし代理の構造を形式化している。すなわち、上の「能動者の座」に位置する徴示素 [ signifiant ]  $a$  は下の「真理の座」に位置する存在  $\Phi$  を代表ないし代理するという構造の形式化である。

この学素は、Lacan が我れらに教えた Saussure の言語の構造の学素  $\frac{S}{s}$  : 「徴示素, その下に, 被徴示」[ signifiant sur signifié ] のひとつの展開にほかならない。

つまり、 $\frac{a}{\Phi}$  の構造は、Lacan が「言語の構造」[ la structure du langage ] と呼ぶものそのものであり、Heidegger 的に言えば、“言語は「存在の住まい」[ das Haus des Seins ] である”限りにおける言語の構造であり、Lacan 的に言えば、言語存在 [ parlêtre ] の構造である。

この構造において、存在  $\Phi$  は唯一のものである。ひとつの[ないし、ひとりの]言語存在が男であろうと女であろうと、その存在  $\Phi$  は同じである。

したがって、男女の性の差異 — 当然ながら、解剖学的差異はここでは問題ではなく、また「心的」「心理学的」「精神的」等の用語は、我れらが思考する根本的な構造論的次元にはふさわしくなく、いわんや「社会学的」でもなく、而して、存在論的次元における差異 — は、存在を代表ないし代理する徴示素  $a$  において規定される。

精神分析においては、性の差異は、徴示素  $\Phi$  への準拠において規定される。 $\Phi$  は、Freud がリビード発達の最終的成熟段階として「ファロスの優位」[ Primat des Phallus ] を要請した限りにおける徴示素ファロスである。性差を決定するのは、解剖学的差異ではなく、単純に、このファロス  $\Phi$  の有無である。女の性を特異的に規定する徴示素は無い。

かくして、存在の真理の現象学的構造  $\frac{a}{\Phi}$  のひとつの様態として、男性言語存在の構造

は学素  $\frac{\Phi}{\varphi}$  によって、女性言語存在の構造は学素  $\frac{0}{\varphi}$  によって、それぞれ形式化され得る。ただし、 $\frac{0}{\varphi}$  の能動者の座の 0 (zero) は、切れめそのもの、穴そのものとしての徴示素  $a$  を表している。

かような形式化は、幾つかの事実の把握を容易にしてくれる。例えば、一般的に言って、女は男よりも不安に陥りやすい。それは、女性構造においては、存在の恐ろしい深淵の穴が口を開いたままになっているからである。それに対して男性構造においては、その穴は、張りぼての勃起したファロスに等しい仮象の徴示素  $\Phi$  により覆い隠されており、存在自身は忘却へと秘匿されている。しかしながら、男が女性構造における仮象ゼロに出会うとき、いわゆる去勢不安が男において惹起される。また、Freud が精神分析治療の行き詰まりとして記述した男における「男性的抗議」と女における「ペニス妬み」は、精神分析の経験において分水嶺を成す分離の瞬間に構造  $\frac{a}{\varphi}$  の滅却が成起しようとするとき、男においては徴示素  $\Phi$  との強固な同一化への固執が滅却に対する障碍となり、女においては新たに徴示素  $\Phi$  を以て異化的同一化構造を強化しようとする傾向がやはり滅却を妨げる、という事態であることが理解される。

男性構造においては、存在の深淵の穴を覆い隠すために原則的には仮象的徴示素  $\Phi$  だけで十分である。それに対して、女性構造においては、あらゆる種類の仮象  $a$  — 衣服、装身具、化粧、外見上の美しさ、等 — が存在の穴の周りに増殖して、その穴を覆い隠すと同時に暗示しようとする。なぜなら、仮象  $a$  がファロスの意義で修飾されて欲望の客体として機能し得るのは、女性構造においてであるから。

以上が、男性言語存在ならびに女性言語存在の構造である。

以上を踏まえて、Lacan の性別の公式に取り組んでみよう。

予備的議論によって、このように指定することができるだろう、即ち、男性言語存在において、命題  $M(x)$  は、存在の真理の現象学的構造の学素において  $a$  を  $\Phi$  に、 $\varphi$  を  $x$  に置き換えることによって得られる構造として定義され得る：

$$M(x) \equiv \frac{\Phi}{x}$$

かくして、男性言語存在の集合  $m$  は、このように定義され得る：

$$m \equiv \left\{ x \mid \frac{\Phi}{x} \right\}$$

この  $m$  は集合として現存しており、 $m$  の要素である  $x$  すべてについて、命題  $\frac{\Phi}{x} : \ll x$  は徴示素  $\Phi$  により代表される」は証明可能である。これが、男性言語存在にかかわる性別の公式のうち  $(\forall x) \Phi(x)$  という式が表していることである。

そして、集合論においては、「あらゆるものを含む集合は現存しない」ということが証明されている。そのことに則って、Lacan は  $\ll \text{rien n'est tout} \gg$  [なにもものもすべてならず](*Autres écrits*, p.440) と言っている。

したがって、 $m$  に属していない何ものかがある。それが、 $(\exists x) \neg \Phi(x)$  という式が表していることである。それは何か？

“それは、いわゆる「父の機能」である” [ *c'est là ce qu'on appelle la fonction du père* ] (*Encore*, p.74) と Lacan は言う。 *L'étourdit* においては、彼はこう言っている：

“le réel de la plage du Nom-du-Père, à ce qu'y échoue le semblant, “réalise” sans doute le rapport dont le semblant fait le supplément, mais ce n'est pas plus que le fantasme ne soutient notre réalité, pas peu non plus, puisque c'est toute [ le fantasme est toute la réalité ], aux cinq sens près, si l'on m'en croit. La castration relaie de fait comme lien au père, ce qui dans chaque discours se connote de virilité. Il y a donc deux dit-mensions du pourtouthomme, celle du discours dont il se pourtoute et celle des lieux dont ça se thomme. (...) Les lieux de ce thommage se repèrent de faire sens du semblant – par lui, de la vérité qu'il n'y a pas de rapport [ sexuel ], – d'une jouissance qui y supplée, – voire du produit de leur complexe, de l'effet dit (par mon office) du plus-de-jouir” (*Autres écrits*, p.460).

“父の名の岸という実在は、そこに仮象が座礁することによって、おそらく性関係(其れの代補を仮象は成す)を実現するだろうが、しかし、それは、幻想が我れらの現実を支えることより以上のことでも以下のことでもない。なぜなら、五感を除けば、幻想は現実すべてであるから — わたしの言うことを信ずるなら。実際、去勢は、父へのつながりとして、あらゆる言説において男

性性として含意されているものを中継する. したがって, 「すべての男について」には二つの言語構造次元がある — すなわち, 「すべての男について」と言われ得る言説の次元と, 其れによって切男[せつだん:切断]が起こるところの場所の次元と. (….)この切男の場所が標しづけられるのは, 仮象の意味を成すことによって, — 仮象をとおして, 性関係は無いという真理の意味を成すことによって, — 性関係を代補する悦の意味を成すことによって, — さらに, それらの複合の生産物, すなわち, (わたしの職務によって)剰余悦の効果と言われるものの意味を成すことによって — である.”

解説してみよう. 式  $(\exists x) \neg \Phi(x)$  が差し徴すものは, いかにも, 父の名である. しかし, その父の名は, 解脱実存 [ ex-sistence ] としての実在の座に位置している. 仮象にとっては実現不可能な性関係(其れを代補することしか仮象にはできない)を, 父の名は実現するかもしれないが, しかし, まことには, 父の名の座は, むしろ, 去勢  $\phi$  の場処である. この去勢の場処は, 剰余悦と呼ばれる仮象の「意味」の座である.

Lacan が用いている新造動詞 *thommer* は, 音においてギリシャ語の名詞 *τομή* [切断]を喚起し, 文字においては男 [ *homme* ] を含んでいる. つまり, 合接:「かつ」で結ばれた複合式  $(\forall x) \Phi(x) \wedge (\exists x) \neg \Phi(x)$  は, 実際には,  $(\forall x) \Phi(x)$  の座(能動者の座)と  $(\exists x) \neg \Phi(x)$  の座(真理の座)との間の分裂, 主体の分裂を表している.

かくして, 父の名が位置づけられる座は, 一なる YHWH — “聴け, イスラエルよ! 我らの神 YHWH は, 一なる YHWH である”(申命記 6,4) — 即ち, 存在  $\phi$  として真理の座に解脱実存する神の座である.

したがって, 式  $(\exists x) \neg \Phi(x)$  を平文に読み下すなら, 「賓辞  $\Phi$  の主辞とならない  $x$  が唯一なるものとして解脱実存する」となるであろう.

女の式へ移ろう. Lacan はこう言っている:

« le sujet [ c'est-à-dire, le parlêtre féminin ] se détermine de ce que, n'existant pas de suspens à la fonction phallique, tout puisse ici s'en dire, même à provenir du sans raison. Mais c'est un tout d'hors univers, lequel se lit tout de go du second quanteur comme *pastout*. Le sujet dans la moitié [ des formules de sexuation ] où il se détermine des quanteurs niés, c'est de ce que rien d'existant ne fasse limite de la fonction [ qui serait le prédicat du parlêtre féminin ], que ne saurait s'en assurer quoi que ce soit d'un univers [ c'est-à-dire, un tout, une totalité ]. Ainsi à se fonder de

cette moitié [ des formules de sexuation ], “elles” ne sont *pastoutes*, avec pour suite et du même fait, qu’aucune non plus n’est toute » (*Autres écrits*, p.466).

“主体[すなわち, 女性言語存在]は, ファロス賓辞を停止するものが現存しないがゆえに, あらゆるものがファロス関数を賓辞とし得る — 無根拠によるものでさえ — ということにより規定される. しかし, それは, すべてであるとしても, 「すべてとして現存するすべて」の外のすべてである. それは, ふたつめの量子子 [  $\neg(\forall x)$  ] によって「すべてならず」として即座に読み取られるものである. [男女ふたつの性別の公式のうち女の側の] 半分において主体は否定された量子子により規定されるが, 賓辞の限界を成すものが何も現存しないことによって, 如何なる主体もひとつのすべてによって己れを確かなものにする事ができないだろう. さように, [性別の式のうち女の側の] 半分に基づく女たちは, すべてならずであり, その結果, かつ, そのことそのものにより, 如何なる女もすべてではない.”

すなわち, 式  $\neg(\exists x) \neg\Phi(x)$  は, こう解釈され得る:もし仮に賓辞  $F(x)$  により定義される女性言語存在の集合  $f \equiv \{ x \mid F(x) \}$  が現存すると仮定すると, その仮定は, 集合論において Cantor の逆説と呼ばれている矛盾を惹き起こす. なぜなら, 賓辞  $F$  の主辞とはならない主体は無い, つまり  $f$  に属さない主体は無いから. したがって, 帰謬法により, 集合  $f$  は現存しないと結論される. それが, Lacan の公式:“定冠詞を付された女は, 無い” [ *il n’y a pas La femme* ] (*Encore*, p.68), ならびに, “女たちはすべてならずである” [ *les femmes ne sont pastoutes* ] (*Autres écrits*, p.466) が差し徴していることである. そこにおいて, *La femme* の定冠詞は, 「女全体」を表す機能を有している.

以上のことから, 式  $\neg(\forall x) \Phi(x)$  も解釈される.

女性言語存在の構造は  $\frac{0}{\Phi}$  と規定され, そこにおいてゼロは, あらゆる仮象から純化され

た切れめそのもの, 穴そのものとしての  $a$  を表す. つまり, 式  $\neg(\forall x) \Phi(x)$ :「徴示素  $\Phi$  により代表されるのはすべての  $x$  ではない」は, 直接に仮象のゼロを差し徴すのではなく, 否定神学において神を直接に肯定文によってではなく, 間接的に否定文によって思考しようとするように, 否定によって存在の深淵の穴を暗示しているのである.

さらに Lacan は, “女たちはすべてならずである”と複数形で述べるのみならず, 単数形で “女はすべてならず”とも言っている. このことは, Lacan が *Séminaire ...ou pire* で持ち出した表現: « *y a d’l’Un* » [一が在る]の部分冠詞を想起させる. *Un* に付された部分冠詞 *de l’* は,

「真理の座に解脱実存する存在としての一は、如何なる徴示素によっても十全にその全体において代表されることはできない」ということを差し徴している。それと同様に、女性言語存在の構造においては、「存在  $\varphi$  の真理を十全にその全体において代表する仮象徴示素は無い」ということは明白である。それに対して、男性言語存在の構造においては、集合  $m$  が、「すべて」の仮象であるにすぎないにもかかわらず、存在事象そのもの全体としての存在として、存在の真理を代表しているかのごとくに己れを見せてかけている。

Lacan が “女の悦は性交によって得られる悦を超えている” [ *la jouissance féminine dépasse celle qui se fait du coït* ] (*Autres écrits*, p.466) と言い、また、“ファロスの彼方の悦” [ *une jouissance au-delà du phallus* ] (*Encore*, p.69) に言及するとき、それによって彼が思考しているのは、あらゆる仮象から純化された悦 — 主体滅却の瞬間に分析者が先取りし、引き受けるであろう死  $\varphi$  からの復活の悦 — の可能性である。その存在構造において、女はその可能性により近く、男はより遠い。

2014年6月28日